

田俊夫、篠崎信男、松山栄吉、安川正彬、○山口正義、山本幹夫、50音順、以下同じ：○印委員長）、5名の専門委員（青木尚雄、岡崎陽一、河野穉果、濱英彦、村松稔）および事務局担当（新津官房企画室長、小林統計情報部人口動態統計課長）が指名された。（青木尚雄記）

## 1981年国際人口学会マニラ総会組織委員会第一回会議

1981年12月にマニラにおいて次回の国際人口学会総会（4年に1度）が開催されることになり、その組織委員会の第一回会合がマニラ市のフィリピン政府人口委員会の事務所で、1976年5月21日から23日までの3日間開かれた。

出席者すなわち組織委員会のメンバーはアルファベット順に列記すると、プリンストン大学の Ansley J. Coale 教授、フィリピン大学の Mercedes B. Concepcion 教授、ブラジルの Jose de Carvalho 氏、フィリピン人口委員会の Benjamin D. De Leon 氏、パキスタンの Sultan S. Hashmi 氏、ポーランドの Jerzy Holzer 氏、シリア人で現在国連西アジア経済委員会人口部所属の Nabil F. Khoury 氏、人口問題研究所の河野穉果、イタリアのフィレンツェ大学教授かつ国際人口学会理事長である Massimo Livi-Bacci 教授、フィリピンセンサス局長の Tito A. Mijares 氏、ベルギー人で国際人口学会事務局長である Bruno Remiche 氏、国連人口基金事務次長でパキスタン人の Nafis Sadik 女史、セネガルの Landing Savane 氏、国連人口部長 Leon Tabah 氏、そしてフランス国立人口研究所の Georges Tapinos 氏である。互選により、議長は Concepcion 女史、副議長に Holzer 氏が選出された。

議題としては次回マニラ総会の日程、会議でどのような部会（セッション）を設け、誰を組織者にし、そしていかにして資金を集めるかということが主要な項目であるが、その中でもどのような部会を設けるか、又誰を組織者（オーガナイザー）とするかが95%の時間を費して論議された議題であった。45に及ぶ部会が選択されそれに見合う組織者の名前が選出された。

ほとんどの部会は3つ及至4つのセッションが同時に進行する並列方式であるが二つだけ特別部会があり、これはその時点ただ一つだけ開かれる Plenary session といわれるものである。これは、一つは「最近の世界人口のレベルと趨勢（出生率、死亡率、人口移動について）の評価」であり、もう一つはそれぞれ部会に提出されたペーパーの総合的概観である。第二の題目はあまり特殊なものとはいえないので、第一の題目が1981年国際人口学会総会のハイライトとなるわけである。（河野穉果記）

## 故岡崎文規元人口問題研究所長を悼む

本年5月8日午前7時20分 元人口問題研究所長、岡崎文規先生が死去され享年84歳であった。

謹んで哀悼の意を表する次第であるが、先生が研究所長をやめられたのは昭和34年4月であった。その後、日本社会事業大学、竜谷大学の教授を歴任し昭和41年4月には勲二等瑞宝章を受けられている。

研究業績については数多く、一般論的人口問題の研究から、さらに人口の資質に関係ありと思われる「自殺問題」「結婚と家族問題」までに及んでおり、かなり幅広い視野をもっていた。人口問題研究所で第1回の出産力調査を行なったのも先生であった。昭和14年から34年にかけて20年の長きにわたって人口問題研究に寄与して頂いたわけであるが、もう一つ特筆すべきことは戦前はすべて事務次官が研究所長となっていたが戦後始めて研究者の所長となりこの意味では第1代目の所長とも言えることである。終戦後占領治下の人口問題研究にはかなり苦勞したと思われる。「苦悶の人口」という著書もその頃であった。私が昭和18年人口民族部と言われた時、部長であった先生と始めて研究的に接触したのは「平均の理論と応用」という